

藤村俊介(チェロ) & 安田謙一郎(チェロ)

曲目解説

F.クーブラン(P.バズレール編):2つのチェロのためのコンセールより

フランソワ・クーブランが1722年に出版した《王宮のコンセール》(全4曲)は、ルイ14世の宮廷で毎週日曜日に催された演奏会のために書かれた室内楽作品。1724年には、続編として《新しいコンセール》(全10曲)が出版された。この2作は通し番号で呼ばれることが多い。

チェロ二重奏への編曲を行なったポール・バズレールは、パリ音楽院のチェロ科教授も務めたフランスのチェロ奏者で、フルニエの師としても知られている。今回は全5楽章のなかから4楽章までをお届けする。「プレリュード」は明るく潑刺とした動きが魅力的。「エール」は愁いを帯びた旋律を聴かせる。「サラバンド」はゆったりとした穏やかな気分に包まれ、「シャコンヌ」は王宮にふさわしい典雅な気品に満ちている。これら4曲は、コンセール第13番(《新しいコンセール》第9番)から採られている。

J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲 第3番

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クォラント／サラバンド／ジーク」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジークの前の第5曲に「メヌエット／ガヴョット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第3番の第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クォラント。第4曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第5曲ブーレは、演奏会用の小品として奏されることも多い。第6曲は、終曲にふさわしい堂々としたジークとなっている。

ロッシーニ:チェロとコントラバスのための二重奏曲(2本チェロ版)

銀行家でアマチュアのチェロ奏者だったデイヴィッド・サロモンズ卿が伝説的なコントラバスの名手ドミニコ・ドラゴネッティとの共演を願い、1824年に作曲された。その後、長らく未出版のままサロモンズ家に所蔵されていたが、1969年に再発見された。

第1楽章では2つの弦の楽しい掛け合いから、旋律と伴奏を交代しながら繰り返す。第2

楽章は、伴奏のピチカートに乗せて朗々と歌われる旋律に、ロッシェニならではの美しさが際立っている。第3楽章は印象的な主題の背後で活躍する低弦の刻みが聴きどころ。

R.カリムリン:無伴奏チェロ・ソナタ 第2番

ラシド・カリムリンは、タタール自治共和国の作曲家同盟議長も務めた人物。本曲は、1990年に作曲された単一楽章の作品である。冒頭はレント、ルバートに始まり、次第に高揚感を得て、ソット・ヴォーチェへと至る。提示部のあとに続く三連音符をかたどった神秘的なリズムは、作曲家の言によれば「抗いがたい脅威を表す」という。中間部には銜いのない旋律が現れ、再現部からは加速度を増して、コーダは胸の痛みを吐露するように終わる。

R.グリエール:2つのチェロのための10のデュオより

レインゴルド・グリエールは、ソビエト初期の音楽界において指導的な役割を果たした作曲家で、モスクワ音楽院作曲科教授も務めた。本曲は1911年に書かれた作品で、小品10曲から構成されるが、今回はその中から4曲を選んで演奏する。第1曲コモドは、優雅にたゆたうような音楽。第2曲レツジェーロは、16分音符のユニゾンが基調となっている。第3曲コン・モートでは、美しく伸びやかな旋律が表情ゆたかに歌う。第4曲は重音の刻みが決まると気持ち良い、躍動感あふれるヴィヴァーチェ。

D.ポッパー:2つのチェロのための組曲

ダーヴィト・ポッパーは、19世紀後半に活躍したプラハ生まれの名チェロ奏者で、作曲家としても数多くのチェロ曲を残した。本曲は1876年に書かれたチェロ二重奏のための組曲。第1曲アンダンテ・グラツィオーソは、ゆったりとしたサロンの甘美な旋律に始まり、第2曲ガヴォットは、長調と短調を繰り返してスラヴの香りを漂わせ、中間部では朗々と抒情を響かせる。第3曲スケルツォは、潑刺とした躍動的な音楽。中間部の重音のハーモニーが美しい。第4曲ラルゴ・エスプレッシオーヴォは、陰のある情熱を秘めた旋律を歌う。第5曲はフィナーレにふさわしい、技巧の見せ場となる輝かしい行進曲となっている。